

肥筑方言におけるノ格主語の主語移動

森山 倭成 岸本 秀樹 木戸 康人

神戸大学大学院／

神戸大学

九州国際大学

日本学術振興会特別研究員

【要旨】 肥筑方言における主語は、生起する環境が主節か埋め込み節かにかかわらず、ガ格の代わりにノ格で標示させることが可能である。先行研究では、肥筑方言のノ格主語が、ガ格主語とは異なり、主語移動（A-移動）を起こさず、vP内に留まると主張されてきた。しかし、本論では、肥筑方言のノ格主語は、vP内に留まるのではなく、TPとvPの間に挟まれたAsp(ect)Pの指定部位置へ主語移動を起こすことを論じる。このことを示すために、まず、未確定代名詞束縛とサー感嘆文に関する言語事実から、ガ格主語はTP指定部位置に移動する一方で、ノ格主語はガ格主語よりも低い構造位置で認可されることを示す。次に、vP分裂文に関するデータから、ノ格主語が主語移動を受けてvP指定部よりも高い位置に移動することを示す。特に、vP分裂文のデータはノ格主語が動詞句内に留まることができないことを示す強い経験的な証拠を提供する*。

キーワード： 肥筑方言、ノ格主語、主語移動、アスペクト、感嘆文

1. はじめに

動詞句内主語仮説（Fukui 1986; Kuroda 1988 など）に代表されるように、主語が現れる構造位置にはいくつかの可能性があり、主語がどのような位置に現れるかを同定することは文法論・統語論の重要な研究課題の1つである。日本語の場合、SOV言語の特性から、語の配列を見ただけでは主語の構造位置を確定できない。そのために、日本語の主語はどのような構造位置に存在するのかという問題がこれまで何度も議論されてきている。日本語の標準語¹における主語はガ格で標示されることが多い。ガ格主語の構造位置については、1990年代には、動詞句内に存在すると主張されたこともあるが、現在では、いくつかの言語事実に基づき、節の主語位置であるTPの指定部に存在すると仮定されることが多い。

日本語の方言に目を向けると、標準語では存在しないタイプの主語が存在することもあり、それがどのような位置に現れるかに関して興味深い問題を提起する。例

* 本論はJSPS科研費JP19J20008, JP19K13161, JP20K00605の助成を受けています。査読の過程において匿名査読者のお二人から有益かつ建設的なコメントをいただきました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。本論の不備や誤りは全て著者の責任です。

¹ 本論でいう「標準語」とは東京都内に限らず日本全国で話される共通語を指す。

えば、九州地方の方言区画の一つに分類される肥筑方言²では、(1)のように、主節に現れる主語をガ格で標示することもノ格で標示することも可能である³。(1c)において、目的語に付くバは、対格標示をする格助詞である。

- (1) a. 看板{が/の}倒れとるばい。
 「看板が倒れているよ。」
 b. 太郎{が/の}走とったばい。
 「太郎が走っていたよ。」
 c. 太郎{が/の}そいば食べとったばい。
 「太郎がそれを食べていたよ。」

標準語においては、ノ格で標示される主語は関係節や名詞補文節のような名詞句に埋め込まれた節でのみ生起する。しかしながら、肥筑方言のノ格主語は、名詞句の埋め込みが起きていない主節にも生起できる。このような肥筑方言のノ格主語の統語位置については、近年、生成文法の枠組みにおいて議論が展開されている。Kato (2007) は、分裂動詞句の仮説 (Split VP hypothesis) (Chomsky 1995) に基づいて、ノ格主語がvP内に留まるとする仮説を提案している。猿渡(2015), Nishioka(2018), Ochi and Saruwatari (2018) も同じくvP内に存在するとする仮説を支持している。分裂動詞句の仮説に基づけば、動詞句は軽動詞から投射するvPと動詞から投射するVPからなる[v_P [v_P…]]の構造を持つ。分裂動詞句の仮説は、近年の生成文法に基づく統語論の研究において一般に採用されており、また、この仮説の是非を検証することは本論の目的ではないため、本論では分裂動詞句の仮説を前提として議論を進める。分裂動詞句の仮説に基づくと、節に対しては、vPの上位に、アスペクトの投射であるAspP、否定の投射であるNegP、時制の投射であるTP、さらにその上位には補文標識の投射であるCPが配置される階層構造の[CP [TP [NegP [AspP [vP [VP …]]]]]]を仮定することができる。

本論では、先行研究の主張とは異なり、肥筑方言におけるノ格主語は、ガ格主語よりも低い構造位置に現れるが、vP内部に留まるのではなく、主語移動を受けてvPの外の投射でアスペクトが関与するAspPの指定部に移動していることを論じる。このことを示すために、まず、未確定代名詞束縛とサー感嘆文におけるガ格主語とノ格主語の異なる振る舞いから、ノ格主語がガ格主語よりも低い構造位置に現

² 肥筑方言という名称は肥前(佐賀県・長崎県)、肥後(熊本県)、筑前・筑後(福岡県)で話される方言の総称である(上村1983)。肥筑方言内で音声化のバリエーションは存在するが、それらは統語論からは独立したものであるため、具体的な音声化に関する変異は捨象する。具体的なバリエーションについては、本文中や脚注で適宜具体例を示す。

³ ノ格は撥音便化することもある。(i)はノ格が音便化して「ん」と発音されることもあることを示している。

(i) 誰{の/ん}来た?
 「誰が来たの?」

れることを示す。次に、vP 分裂文のデータから、ノ格主語がガ格主語と同じように vP から抜き出されていることを論じる。これら二種類のデータから、ノ格主語は vP よりも上位の投射の AspP に移動することが示される。

本論の議論は以下の通りに進める。第 2 節では、ノ格主語が主語としての特性を持つことを確認する。第 3 節では、動詞の後に現れる「も」の未確定代名詞束縛を見ることによって、ノ格主語がガ格主語よりも下位の構造位置に現れることを示す。次に、サー感嘆文では、ノ格主語・目的語が現れても、ガ格主語・目的語が生起できないことから、時制要素によりガ格主語のガ格が認可されていることを論じる。さらに、vP 分裂文に基づいて、ノ格主語が TP と vP の間に存在する投射に移動することを示す。第 4 節では、主語移動の結果、ガ格主語は TP の指定部に現れるのに対して、ノ格主語は AspP の指定部に現れることを論じる。第 5 節では、主語の格標示と素性継承の関係について議論する。第 6 節は結論である。

2. ノ格主語の主語性と生起制限

肥筑方言のガ格主語と交替するノ格主語の構造位置についての議論に入る前に、(非状態動詞のとり) ガ格項とノ格項が主語の性質を持っていることを確認する。日本語において主語の性質を確認する主なテストには主語尊敬語化と再帰代名詞化がある(柴谷 1978; Saito 2009; Kishimoto 2012)。

- (2) a. 山田先生が走っていらっしやっった。
b. 太郎_iが花子_jに自分_iの部屋で数学を教えたらしい。

主語尊敬語化の敬意の向けられる対象と「自分」の先行詞は、どちらも主語に限定される。(2a) ではガ格で標示される「山田先生」が尊敬語化の対象となり、(2b) では「太郎」が再帰代名詞の先行詞となる。(2a) と (2b) から、ガ格項を主語と認定することができる。肥筑方言についても同じことが言える。

- (3) a. 山田先生{の/が}走っていらっしやっったばい。
「山田先生が走っていらっしやっったよ。」
b. # 太郎君{の/が}山田先生ば探していらっしやっったばい。
「# 太郎君が山田先生を探していらっしやっったよ。」
(4) 太郎_i{の/が}花子_jに自分_iの部屋でそんなことば教えたらしか。
「太郎_iが花子_jに自分_iの部屋でそのことを教えたらしい。」

主語尊敬語化が関わる (3a) の例は、ノ格あるいはガ格で標示される「山田先生」が尊敬語化の対象となることを示している。一方で、(3b) はヲ格で標示される「山田先生」が尊敬語化の対象とならないことを示している。さらに、(4) は、ノ格あるいはガ格で標示される「太郎」が「自分」の先行詞となることを示している。主語指向性を持つ主語尊敬語化および再帰代名詞化の事実から、肥筑方言において主語はガ格だけでなくノ格も伴うことができることがわかる。

肥筑方言のノ格主語には、少なくとも2つの生起制限がある。まず、ガ格主語とノ格主語が交替できることからわかるように、どちらのタイプの主語が現れても文が表す論理的な意味は同じである。しかし、肥筑方言のガ格主語では総記と中立叙述の両方の解釈が得られるが、ノ格主語は中立叙述の場合にのみ用いられる (Kato 2007; Nishioka 2018; cf. Kuno 1973)。したがって、「*太郎だけの来たばい。」のように、「だけ」が付いて、総記の意味が強制されるような文ではノ格は容認されない (Nishioka 2018)。一方、ガ格が付く場合は、総記の意味が容認されるので「太郎だけが来たばい。」とすることは問題ない。

次に、ノ格は一人称代名詞の主語には付きにくい。「?{私/俺}の次郎と遊ぶよ。」と「{私/俺}が次郎と遊ぶよ。」の文法性の対比が示しているように、一人称代名詞の「私」や「俺」には、通常、ノ格は付かない。上代語におけるノ格主語に関する研究である野村 (1993) は、上代ではノ格は一人称代名詞に付くことがほとんどなかったと記述している。そうすると、肥筑方言において一人称主語にノ格が付きにくいのは、野村が考察の対象にしている上代語を含むいわゆる上代の日本語において見られた性質が肥筑方言で現在も保持されているためであるという可能性が考えられる。

以降の節では、ガ格主語とノ格主語の構造位置について具体的な検討を行うが、肥筑方言の中でも特に福岡方言と長崎方言に基づいて議論を行う。以下で示す例の文法性判断は、福岡方言話者 (福岡県福岡市出身・30代男性) および長崎方言話者 (長崎県佐世保市出身・20代男性) の判断に基づくが、本論で使用する主語の位置を確認するテストについては、出身地域の異なる方言話者も基本的に判断が共有されていることを確認している。ただし、地域あるいはその他の理由で揺れが見られるデータを一部使用せざるをえない場合もあり、その際には、揺れに関する調査も行った。例えば、他動詞文におけるノ格主語の容認度については個人差や地方差が認められる。これに対して、自動詞構文 (非能格動詞や非対格動詞の文) では、三人称のノ格主語は基本的に個人差や地方差はなく容認される (ノ格主語の使用域の地理的分布については九州方言学会 (編) (1991: 166-167) を参照) ⁴。また、肥筑方言に

⁴ 長崎方言話者 10 名 (20代 7 名, 40代 1 名, 50代 1 名, 70代 1 名), 福岡方言話者 6 名 (20代 1 名, 30代 3 名, 40代 1 名, 60代 1 名) に容認度調査を行ったところ、長崎で 10 名中 8 名 (20代 5 名, 40代 1 名, 50代 1 名, 70代 1 名), 福岡で 6 名中 2 名 (30代 2 名) が (1c) の他動詞文におけるノ格主語を容認した。ただし、他動詞文を容認できないとした話者も (1b) のような非能格自動詞文は容認可能であると判断した。(実際には上記の福岡方言話者 6 名以外にも 4 名に対して、動詞述語文におけるノ格主語の容認度を訊ねた。しかし、これらの話者は他動詞文や非能格自動詞文に加え、(1a) のような非対格自動詞文 (他に「溺れる」「死ぬ」「こける」) も容認できないと判断した。(ただし、「雨{が/の}降った」のような現象文では交替が可能であるという。) 直接的な原因は明らかでないが、福岡では若い世代を中心にノ格主語の使用頻度が少なくなっていることが関係していると考えられる。実際、4 名の話者はいずれも 30 代前半であった。) 一人称代名詞のノ格主語については、長崎方言話者 10 名のうち 7 名 (20代 4 名, 40代 1 名, 50代 1 名, 70代 1 名), 福岡方言話者 6 名のうち 4 名 (20代 1 名, 30代 1 名, 40代 1 名, 60代 1 名) が容認できないとしている。

において主語がガ格とノ格のどちらで標示されるかは、主語の指示対象の尊卑が関係している可能性もあると考えられている(九州方言学会(編)1991;坂井2013など)。しかし、本論の目的は、ノ格主語がどのような条件で現れるかではなく、ノ格主語が現れた場合に、どのような統語構造上の位置に現れるかを明らかにすることである。ノ格主語の統語的位置と述語の他動性や尊卑表現がどのようにノ格主語の生起に影響するかは本論の目的を超えるものであり、これ以上深入りしない。他動詞文と自動詞文のどちらでも検証できる現象については、ノ格の生起制限が強くなる他動詞文ではなく自動詞文を用いて検討を行う。

3. ノ格主語の構造位置

本論では、ノ格主語が動詞句の外に現れることを示す。一方、Kato (2007)、猿渡(2015)、Nishioka (2018)、Ochi and Saruwatari (2018)は、ノ格主語は動詞句の内側に現れると主張している。なかでも、Kato (2007)は少し込み入った議論をしているので、まずその問題点を検討する。Kato (2007)によれば、肥筑方言の一つである熊本方言では、(5a)のように、文頭の主語をノ格で標示することはできず、ガ格を用いる必要があるという。一方で、(5b)に示すように、目的語がかき混ぜ移動(scrambling)を受けた場合にはノ格が可能になるとしている。

- (5) a. 太郎{が/*の}その小説ば買うたばい。
 「太郎がその小説を買ったよ。」
 b. その小説ば太郎{が/の}買うたばい。
 「その小説を太郎買ったよ。」 (Kato 2007, 判断は Kato による)

Kato (2007)はEPP素性の要請によってTP指定部が何らかの要素で埋められていなければならないと仮定している。その上で、(5a)はノ格がvP内に留まるためにTの主要部にあるEPP素性が照合されず非文になると述べている。さらに、Kato (2007)は、Miyagawa (2001)に従い、EPP素性は、かき混ぜ移動による照合も可能であると仮定している。(5b)は、目的語である「その小説ば」のかき混ぜ移動によってEPP素性が照合されるので文法的となる。

しかし、この分析には二つの問題点がある。第一に、形容詞文や自動詞文にノ格主語が現れるデータの文法性に関して誤った予測をしている(Nishioka 2018)。(6)のように形容詞文や自動詞文のノ格主語は容認される。Kato (2007)の分析では、ノ格主語はvP内に留まるので、事実とは異なり、(6)にはEPP素性を認可する要素がなく、非文になることが予測される。

- (6) a. 月のきれいか。 b. 先生の来た。
 「月がきれいだ。」 「先生が来た。」

第二の問題点は、(5a)のデータの文法性である。Kato (2007)は(5a)ではノ格が許容されないと判断しているが、Kato (2007)と同じく熊本方言のデータを扱っ

た吉村(2007)ではノ格が同じ語順で許容されている。このことは、熊本方言では(5a)のような文のノ格を容認する話者もいることを示唆している。もちろん、この事実はKato(2007)にとって問題となる。

Kato(2007)以降の先行研究でも、詳細は異なるものの、ノ格主語がvP内に留まるといふ提案が見られる。しかし、第3.1節から第3.3節では、ノ格主語がガ格主語よりも下位の構造位置にあるが、実際には、主語移動(A-移動)によりノ格主語もvPから抜き出されていることを未確定代名詞束縛・サー感嘆文・vP分裂文のデータから示す。

3.1. 未確定代名詞束縛

まず、未確定代名詞束縛について考察する。未確定代名詞は、一般に、代名詞それ自体では意味が決まらず、「か」あるいは「も」のような量化の力(quantificational force)を持ったQ要素(認可子)によって意味が決まる要素である(Kuroda 1965)。例えば、未確定代名詞の「誰」は、(7)のように、疑問文に生起すると*wh*疑問詞、存在量化を表す「か」が後続する場合は存在量化詞としての解釈を受け、Kishimoto(2001)が観察しているように、否定文において「も」に束縛されると、否定極性表現(Negative Polarity Item: NPI)としての解釈を受ける。

- (7) a. 誰が来ましたか? (疑問詞)
 b. 誰かが来た。 (存在量化詞)
 c. 誰も来なかった。 (NPI)

また、(8)のように「も」が未確定代名詞に直接付加されている場合は、目的語位置に未確定代名詞が現れても主語位置に未確定代名詞が現れてもよい。

- (8) a. 太郎が何も食べなかった。 b. 誰もご飯を食べなかった。

しかし、「も」は、未確定代名詞をc-統御する限りにおいて未確定代名詞に隣接した位置に現れる必要はなく、動詞に後続してもよい。

- (9) a. 太郎が[vP何を食べ]もしなかった。
 b. *誰が[vPご飯を食べ]もしなかった。

(9)のように「も」が後続する場合、未確定代名詞は、目的語の位置に現れることはできるが、主語位置に現れることはできない。つまり、動詞の後に「も」が続く場合には、(9a)と(9b)のように、未確定代名詞束縛の可能性に関して主語と目的語の非対称性が観察されるのである。このように、Kishimoto(2001)は、動詞に後続する「も」の作用域がvPであるため、「も」は目的語の未確定代名詞は束縛できるが、主語の未確定代名詞は束縛できないとしている。

ここで、肥筑方言に目を向けると、ガ格主語とノ格主語は、(10a)と(10b)に

示すように、未確定代名詞束縛に関して非対称性が観察される (cf. 猿渡 2015) ⁵。

- (10) a. 誰{*が/の}行きもせんかった。
 「誰も行かなかった。」
 b. 誰{*が/の}遊びもせんかった。
 「誰も遊ばなかった。」
 c. 太郎には何{*が/の}分かりもせんかった。
 「太郎には何も分からなかった。」

(10a) と (10b) で示されているように、動詞に後続する「も」は、ガ格主語の未確定代名詞を束縛できないが、ノ格主語の未確定代名詞は束縛できる。また、(10c) で示されているように、目的語の未確定代名詞束縛も可能である。

さらに、肥筑方言では、(11a) に示す標準語と同じように、主語は、動作主でかつ動作の起点と解釈される場合には、「から」を伴うことができる。カラ格主語の未確定代名詞は、(11b) で示されるように、動詞に後続する「も」の束縛が可能である。

- (11) a. 誰からそのことを伝えもしなかった。(標準語)
 b. 誰からそのことば伝えもせんかった。(肥筑方言)

(11) の「から」を伴う句が統語的に主語として機能することは、(12a) の主語尊敬語化および (12b) の再帰代名詞束縛の事実から確認できる。

- (12) a. 山田先生からその伝言ばお伝えになった。
 「山田先生からその伝言をお伝えになった。」
 b. 太郎から自分の転職のことば伝えた。
 「太郎から自分の転職のことを伝えた。」

Kishimoto (2012) で議論されているように、カラ格主語は、時制要素による格の認可の必要がないので、vP 内に留まる。したがって、カラ格主語が動詞に後続する「も」によって束縛が可能であることは十分に期待される。

未確定代名詞束縛のデータが示す重要な点は、ガ格主語が動詞に後続する「も」の束縛領域外にあるが、ノ格主語に関しては「も」の束縛可能領域の中に存在することである。これらの事実から、ノ格主語がガ格主語よりも構造的に低い位置に現れていることがわかる。

3.2. サー感嘆文

次に、サー感嘆文について見ると、肥筑方言には、文末がサーという終助詞で結ばれる特殊な感嘆文が存在する。この感嘆文は目前で起っている出来事に対して

⁵ (10) の「せんかった」は「せんやった」と発音されることもある。

感情を表出する表現で、本論では、サー感嘆文 (*Saa-exclamatives*) と呼ぶ⁶。(九州方言学会(編)(1991: 187)は、肥筑地方の中でも特に西部でこの構文が使われることを報告している。)肥筑方言のノ格主語がガ格主語とは異なる主要部により格が認可されていることは、形態的には形容詞語幹に付くという特徴があるサー感嘆文の事実から確認できる。例えば、(13)では、形容詞「ぬくか(暑い)」と「うるさか(うるさい)」の語幹にサーが接続することで、標準語訳に相当する感情表出の意味が伝達される。

- (13) a. ぬくさー! b. うるささー!
 「暑っ!」 「うるさっ!」

サーは、形容詞以外の品詞には接続することはない。例えば、「*賢か人さー」のように名詞にサーが付くことはできない。

興味深いことに、サー感嘆文にガ格主語が現れることはできないが、ノ格主語は生起させることができる。例えば、(14)のサー感嘆文に現れるノ格の「足」と「目」は、それぞれ主語として解釈される。

- (14) a. 足のはやさー! b. 目のかゆさー!
 「足、はやっ!」 「目、かゆっ!」

(14)に対応するガ格主語のサー感嘆文は、(15)に示されているように、非文法的になる⁷。

- (15) a. *足がはやさー! b. *目がかゆさー!

通常の文では、(16)のように、形容詞述語の主語もノ格あるいはガ格を伴うことができる。

- (16) 足{が/の}はやか。
 「足が速い。」

形容詞がとる補語や願望を表す「たい」などに埋め込まれた項はサー感嘆文に生起することができる⁸。((17c)に示す願望を表す「たい」とサー感嘆文の共起関係については、住田(1986)と濱中(2009)も実例を報告している。)

⁶ 先行研究ではサ詠嘆法と呼ばれることもある(住田1986;九州方言学会(編)1991)。生成文法では、詠嘆や感動を表すような文は一般に感嘆文(exclamative sentence)と呼ばれることが多いため、本論ではこの構文をサー感嘆文と呼ぶ。

⁷ 濱中(2009:176)も助詞は基本的に「が」にならないとしている。

⁸ 「たい」は、拘束形態素であるため、助動詞に分類されることもあるが、統語的には形容詞として機能する。このことは、Kishimoto(2007)などで議論されている。

- (17) a. 人に厳しさー！ b. 子供に甘さー！ c. 水飲みたさー！
 「人に厳しっ！」 「子供に甘っ！」 「水飲みたっ！」

願望を表す「たい」に埋め込まれた他動詞の目的語は、バ格、ガ格、ノ格を伴うことができるが、(18b)のように、サー感嘆文では、バ格とノ格のみが許容される。

- (18) a. 酒{ば/の/が}飲みたか。 b. 酒{ば/の/*が}飲みたさー！
 「酒{を/が}飲みたい。」 「酒飲みたっ！」

つまり、サー感嘆文では、ガ格で標示される主語や目的語は現れることができないが、ノ格で標示される主語や目的語は生起できるのである。

一見すると、ノ格主語が現れるサー感嘆文は名詞化接尾辞の特殊な用法にも思える (cf. 住田 1986)。しかし、サー感嘆文は名詞化接辞サによって名詞化された表現とは異なる。(標準語も肥筑方言も同様に、) 名詞化接辞サによって名詞化された句に含まれる項はノ格で標示される。また、形容詞のとり二格補語は、(19)に示すように、名詞化された句の中では、二格のままでは現れることができず、「への」というようにノ格を伴わなければならない。

- (19) 子供{への/*に}甘さ

しかし、サー感嘆文では、(20)に示すように、「甘い」などの他動的な形容詞がとる二格項をノ格で標示することはできない。

- (20) 子供{に/*への}甘さー！
 「子供に甘っ！」

サー感嘆文の派生に名詞化が関与しているのであれば、(20)において二格項のノ格標示が容認されるはずであるが、実際のところは容認されない。また、サー感嘆文では助詞の脱落が可能である。例えば、(21)のように「腰」と「足」はノ格を伴うことができるが、ノ格は省略しても文法的である⁹。

- (21) a. 腰(の)痛さー！ b. 足(の)はやさー！
 「腰痛っ！」 「足はやっ！」

これとは対照的に、接辞サによって名詞化が起こった場合は、(22)に示すように、ノ格の脱落が不可能である。

- (22) a. 腰*(の)痛さ b. 足*(の)はやさ

⁹ 長崎方言話者 10 名と福岡方言話者 6 名に対して調査を行ったところ、16 名中 11 名 (長崎 7 名、福岡 4 名) が助詞の脱落を容認した。長崎方言話者は 10 名中 7 名 (20 代 5 名、40 代 1 名、50 代 1 名) が「容認できる」、2 名 (20 代、70 代) が「容認できない」、1 名 (20 代) が「どちらとも言えない」と判断した。また、福岡方言話者は 6 名中 4 名が「容認できる」(20 代 1 名、40 代 1 名、30 代 1 名、60 代 1 名)、2 名 (30 代) が「容認できない」と判断した。

名詞化表現の中に現れる項にはノ格が必要であるが、サー感嘆文には必ずしも要求されない。(20) および (21) のデータから、サー感嘆文のサーは名詞化接辞のサとは異なり、名詞化を引き起こさないと見える。

それでは、なぜサー感嘆文では、(15) と (18) で見たように、ガ格項の生起が許容されないのであろうか。これは、サー感嘆文ではガ格主語を認可する時制要素が生起しないためである。ガ格項の格を認可する要素は、時制要素 T であるとされる (Takezawa 1987; Kishimoto 2001)。サー感嘆文では、ガ格を認可する T が投射した TP が選択されないため、ガ格主語やガ格目的語は現れないのである¹⁰。

否定辞句 (NegP) の研究を行った Zanuttini (1996) は、NegP と TP の関係性に関して、NegP は TP が投射する時にのみ投射するという一般化を提示している。サー感嘆文のサーには、形容詞を接続できるが、(23) に示されるように、否定辞ナに接続することができない。否定辞のナは形容詞型の活用をする (否定辞のナの活用: あつ—なかる (推量), あつ—なかった (過去), あつ—なか (終止), あつ—なか日 (連体))。このことから、サー感嘆文には TP が投射しないために NegP も投射しないことが示唆される。

(23) a. *[NegP あつ—な] さー! b. *[NegP かしこ—な] さー!

一方、同じナが現れても、否定辞ではなく形容詞の一部として機能している場合には、(24) のように、サー感嘆文は容認される (形容詞ナの活用: だらしなかる (推量), だらしなかった (過去), だらしなか (終止), だらしなか人 (連体))。

(24) a. だらしなさー! b. おとなげなさー!
「だらしなっ!」 「おとなげなっ!」

サーは形容詞および、形容詞の活用をする「たい」に付くことができるので、(23) は形態的な制限によって不適格になっているのではなく、NegP を補部に選択できないため、排除されると考えられるのである。

サー感嘆文では、形容詞述語の上に投射する TP や NegP は現れない。しかしそれでも、ノ格主語は現れることができる。このことは、ノ格主語のノ格は、否定辞が現れる NegP やガ格主語のガ格を認可する時制が現れる TP よりも低い構造位置にある投射の主要部によって認可されていることを示している。

3.3. 主語移動と vP 分裂文

第 3.1 節で示した動詞に後続する「も」による未確定代名詞束縛の事実は、肥筑方言でのガ格主語は TP の指定部に上昇しているが、ノ格主語はガ格主語よりも低い構造位置に現れることを示唆している。この事実だけを見ると、ノ格主語は vP

¹⁰ サーは時制要素の「た」に接続できない。「た」は形容詞ではないので、不適格な文となる。

(i) a. *[TP あつかった] さー! b. *[TP かしこかった] さー!

内に留まっていると考えたくなるが、実際にはノ格主語はvPに留まっているのではなく、vPの外に移動していることを示す経験的事実が存在する。以下では、「動詞句+形式名詞コト」の形式でvPが焦点部に現れる分裂文を用いて、ノ格主語がvPの外に移動していることを示す。

ノ格主語の構造位置を検証するために本節で取り上げるvP分裂文は、(25b)のような分裂文である。

- (25) a. 太郎が校庭で走った。
b. [太郎がした]のは[vP校庭で走る]ことだ。

岸本(2015, 2016)によれば、(25a)から派生された(25b)の分裂文は、焦点位置にvPを置く操作が関わる¹¹。肥筑方言でも同じ操作が可能である。vP分裂文の前提節にはガ格主語が現れてもノ格主語が現れてもよい。

- (26) [太郎{が/の}した]とは校庭で走ることばい。
「太郎がしたのは校庭で走ることだ。」

岸本(2015, 2016)は、(26)の形式を持つ分裂文の焦点部に来る構成素はvPであるとしている。そして、焦点部に動詞句より高い位置にある構成素が生起しないことは、いくつかの事実から確認することができる。分裂文の統語的な分布は標準語と肥筑方言で同じなので、以下では肥筑方言の例のみを挙げる。まず、TPを修飾するテンス副詞「昨日」は、(27)のように、分裂文の前提節に現れることはできるが、焦点部には生起することができない。

- (27) a. [太郎が昨日した]とは[校庭で走る]ことばい。
b. *[太郎がした]とは[昨日校庭で走る]ことばい。
「太郎が(昨日)したのは(*昨日)校庭で走ることだ。」

さらに、(28)に示されているように、時制要素の「た」も、前提節に起こるこ

¹¹ 記述的には、焦点要素の移動により、分裂文ができるとしているが、理論的には、空演算子の移動が関わっていると考えることができる。ガ格主語が現れる文からvP分裂文を作る場合には、vPの中には移動により残された主語の痕跡が存在する。この痕跡は先行詞(TPにあるガ格主語)にc-統御されなければならないが、分裂文の焦点位置に現れると、c-統御の条件が満たされなくなる。そのために、動詞句内の主語の痕跡はPROによって置き換えられ、(i)のような構造が派生される。

(i) [OP[太郎が_[vP t_i]した]の]は_{[vP PRO 本を読む]_i}ことだ

(i)では、分裂文の前提節に空演算子OPの移動が起こり、焦点位置の構成素はOPと叙述関係を持つことによって、前提節のvP要素と認定される。日本語ではPROに有生性の制約が課されるので、vP分裂文のもとになる文の主語は、行為者(動作主)としての資格がなければならず、無生物主語は許容されない(「*雨がしたのは降ることだ」)(岸本2016参照)。本論で重要な点は、vPが焦点位置に配置できることである。したがって、vP移動の分析をとっても空演算子移動の分析をとっても本論での論点には影響がない。

とはできるが、焦点部には表出できない¹²。

- (28) * [太郎が昨日した]とは [校庭で走った]ことばい。
 「太郎が昨日したのは校庭で走ったことだ。」

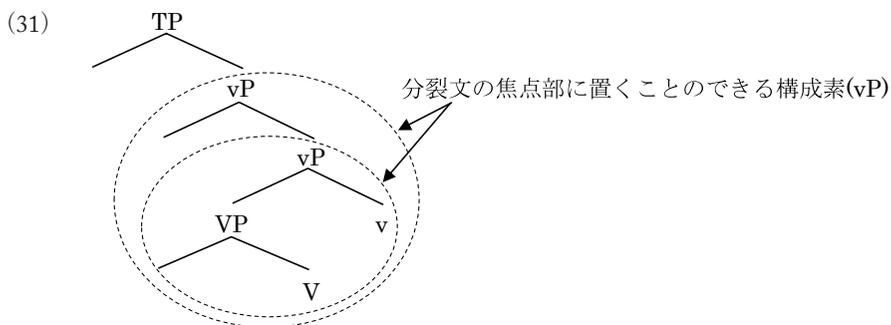
また、岸本 (2015) は描写述語を用いて、分裂動詞句仮説 (Split VP hypothesis) (Chomsky 1995) を支持する議論を展開している。(29) に示すように、目的語指向性のある描写述語は分裂文の焦点部に現れることはできるが、前提節には現れることができない。

- (29) a. [太郎がした]とは [生で魚ば食べる]ことばい。
 b. * [太郎が生でした]とは [魚ば食べる]ことばい。
 「太郎が (*生で) したのは (生で) 魚を食べることだ。」

他方、主語指向性のある描写述語は前提節と焦点部のどちらにも現れることができる。

- (30) a. [太郎がした]とは [泥酔状態で踊る]ことばい。
 b. [太郎が泥酔状態でした]とは [踊る]ことばい。
 「太郎が (泥酔状態で) したのは (泥酔状態で) 踊ることだ。」

(29) と (30) の分裂文における描写述語の分布から以下のことがわかる。まず、目的語指向性のある付加詞は VP に付加するため常に焦点部に現れる。しかし、主語指向性のある付加詞は vP に付加し、二層の vP ([vP 付加詞 [vP ……]]) が作られるため、(30) のように、vP 分裂文の前提節にも焦点部にも現れることができる。このことは、(31) のように図示できる。



¹² 査読者の一人は、(28) の例文に対応する標準語のデータを容認可能であると判断している (「太郎が昨日したのは校庭で走ったことだ。」)。一方、岸本 (2015) は「こと」節に時制辞の「た」が現れる標準語のデータを非文法的であるとしている。本論では肥筑方言のデータの文法性判断を問題にしているので、標準語での判断の個人差については立ち入らない。

前提節と焦点部で現れることができる要素に差があることは、他動詞の目的語からも確認できる。他動詞の目的語は、前提節に生起すると、(32)に示すように非文法的になる。

(32) *[太郎{が/の}本ばした]とは読むことばい。

(32) が容認されないのは、目的語を収容するVPの投射が前提節に存在しないためである。目的語は焦点部であるvPの内部にあるVPの補部に現れるので、目的語は焦点部にしか現れることができないのである。

さらに、岸本(2016)は主語位置に関しても議論しており、ガ格主語はTP指定部に移動するためvP分裂文の焦点部に現れることができないとしている。そして、肥筑方言でも、(33)のように、ガ格主語は前提節にしか現れない。

(33) a. [みんなが熱心にした]とは[v_P校庭で走る]ことばい。
 b. *[熱心にした]とは[v_Pみんなが校庭で走る]ことばい。
 「(みんなが)熱心にしたのは(*みんなが)校庭で走ることだ。」

一方、カラ格主語は、ガ格主語とは異なり、移動せずにvP内に留まっているので、前提節にも焦点部にも現れることができると岸本(2016)は論じている。肥筑方言でも、(34)のように、カラ格主語は分裂文の前提節と焦点部の両方に生起できる。

(34) a. [昨日太郎からした]とは[v_Pジョンに話しかける]ことばい。
 b. [昨日した]とは[v_P太郎からジョンに話しかける]ことばい。
 「昨日(太郎から)したのは(太郎から)ジョンに話しかけることだ。」

(34a)はカラ格主語を除いたvP要素が焦点部に生起できることを示し、(34b)はカラ格主語を含むvPが焦点部に生起できることを示唆している。カラ格主語の振る舞いは、(30)で示したvPに付加された付加詞と同じである。カラ格主語は、付加詞とは異なり、vから動作主の意味役割を与えられて主語として機能するが、統語的には、「泥酔状態で」と同じように、vPに付加された構造([v_Pカラ格主語[v_P……]])を持つのである。

いずれにせよ、ここで重要な点は、カラ格主語はvPに付加され、vPの投射内に留まる要素なのでvP分裂文の焦点部での生起が許されることである。これに対して、ノ格主語は、(35)に示すように、vP分裂文の前提節のみに現れ、焦点部に現れることはできない。

(35) a. [昨日太郎のした]とは[v_P校庭で走る]ことばい。
 b. *[昨日した]とは[v_P太郎の校庭で走る]ことばい。
 「昨日(太郎が)したのは(*太郎が)校庭で走ることだ。」

(27)–(30)で見たように、vPに付加される要素は前提節と焦点部に現れることができるが、vPの外部に位置する要素は焦点部に現れない。したがって、ノ格主語

が前提節内にしか現れることができないという事実は、ノ格主語がvP内にあるのではなく、vPより高い構造位置にあることを示している。

ノ格主語がvP内に留まらないという事実は、ノ格を認可する主要部にEPPの要請があることから説明できる。ガ格(主格)やヲ格(対格)のような構造格(structural Case)は、それぞれT主要部、v主要部(またはV主要部)によって構造的に格の認可を受けるとされる(Chomsky 2001)。一方、カは後置詞で、カラ格を持つ項は後置詞句を形成する。後置詞句は構造的な格の認可を受けず、補部に現れる名詞句に〈起点〉の意味役割を付与する(岸本 2016)。カラ格主語は統語的には後置詞句を形成し、T主要部による格の認可が必要でないため、vP内に留まってよい。一方で、肥筑方言におけるノ格は、特定の意味関係を指定しないので、構造格に分類することができる。カラ格主語とは違い、ノ格主語がvP内に留まれないのは、ノ格を認可する主要部にEPPの要請があり、ノ格主語が動詞句の外に移動するためである。

ノ格主語は、ガ格主語と同様に、vP分裂文の前提節に現れることはできても焦点部に現れることができない。このことは、ガ格主語だけでなくノ格主語も動詞句の外に現れることを示している。さらに、ガ格主語の未確定代名詞は動詞に後続する「も」による束縛ができないが、ノ格主語の未確定代名詞は束縛が可能である。また、サー感嘆文では、ガ格主語とは異なり、ノ格主語は現れることができる。この2つの事実は、ノ格主語がTPより下位にあることを示している。未確定代名詞束縛とサー感嘆文とvP分裂文の事実を組み合わせると、ノ格主語はvPより高い位置にあって、かつTPやNegPより下位にあるという結論が導かれる。

4. AspP

第3節でも論じたように、動詞に後続する「も」の未確定代名詞束縛の事実とvP分裂文の事実は、ノ格主語がvP内部の主語位置から抜き出されていることを示唆している。ノ格主語を未確定代名詞束縛できる「も」は、(10)に示したように、否定辞よりも前に現れる。このことは、ノ格主語が現れる位置がNegPよりも下位の構造位置でなければならないことを示している。また第3.3節で示したvP分裂文の事実は、ノ格主語がvPよりも上位の構造位置に現れることを示しているため、ノ格主語はNegPとvPの間の構造位置に現れるはずである。この分布の説明には、どのような理論をとるかによりいくつかの可能性が考えられるが、(36)のように、ノ格主語は、アスペクトが関わるAspPの指定部にあることを提案する。

(36) [TP [AspP SUBJ-no [vP v] Asp (tor-/yor-)] T]

(36)の分析では、肥筑方言のノ格主語が、NegPとvPの間にあるAspPの主要部位置を占めるアスペクトの意味を指定する形式のトルとヨルと同じ統語的な分布を示すので、トルとヨルの構造位置に由来する分布的な特性が、ノ格主語においても観察されることを予測する。

そのことを示す前に、トルとヨルが現れる構文の特徴について観察する。トルは形態的には動詞の語幹に付き、意味的には結果状態ないし動作の進行を表す。ヨルは動詞連用形に付き、意味的には動作の進行を表す¹³。

- (37) a. 太郎の走っとった。 b. 太郎の走りよった。
 「太郎が走っていた。」 「太郎が走っていた。」

トルとヨルは、(時制要素のルやタと相補分布をなす)テを介さず動詞に直接接続するため、vP の上位の構造位置にある AspP の主要部位置を占めると考えることができる。対照的に、標準語のテイルのようなアスペクト形式は、トルやヨルとは異なり、(ルやタと相補分布を示す)テを伴う形をとるため、標準語のイルは、TP の投射がある補文節をとっていると考えられる。また、V-トルと V-ヨルにおいて、トルとヨルは前に現れる動詞 V と形態的にまとまっているために、「走っと (*は)る」「走りよ (*は)る」のように取り立て詞の挿入が許容されない¹⁴。これに対して、標準語の V-テイルの場合、V とテイルは形態的に一語化しておらず、「走っている」という述部に取り立て詞を挿入して「走って (は) いる」とすることが可能である。

動詞句 vP の上にあるアスペクトの投射である AspP に現れると考えられるトルとヨルは、(38) のように否定の内側に現れる¹⁵。

- (38) a. 太郎の走ったらんかった。 b. 太郎の走りよらんかった。
 「太郎が走っていなかった。」 「太郎が走っていなかった。」

(38) の「走っ-とら-ん-かった」や「走り-よら-ん-かった」は V-Asp-Neg-T の語順を持つ。Asp と Neg の語順を入れ替えて、「*走ら-ん-とっ-た」や「*走ら-ん-よっ-た」とすることはできないため、AspP は NegP と vP の間に現れる投射であると言うことができる。一方、複文構造を持つテイル文では、「太郎がご飯を食べないでいる」のように、否定辞がテイルの直前に起こることも可能である。同様に、肥筑方言にはテオルというアスペクト形式もある。「言わんではおれん」のように、否定辞がテの直前に生起できる。このことからわかるように、テオルは複文構造を持つため、単文構造を持つトルやヨルとは区別しなければならない。

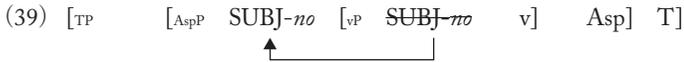
AspP の主要部にトルやヨルが現れると、結果状態や進行の意味が表される。しかし、Asp 主要部には常にトルかヨルのいずれかが現れるわけではない。例えば、「太郎の来た。」のように AspP の主要部要素が明示的に現れず、アスペクトの意味が表されない場合にも構造上は音形を持たない AspP が存在する。したがって、トルやヨルが現れない文においても、ノ格主語は vP 内の基底位置から主語移動を受

¹³ 長崎県佐世保市方言話者 (20 代男性) の判断ではトルに動作の進行の解釈はなく、結果状態の読みだけが許容される。トルの用法に関しては地域差や個人差が認められる。

¹⁴ 時制の前に「する」を導入した「走りはしよった」「走りはしとった」は容認される。

¹⁵ NegP は、未確定代名詞束縛で動詞に後続する「も」の束縛領域外に投射されるために、ノ格主語が移動する投射ではありえない。

け、(39)のように、AspPの指定部へと移動すると考えることができる¹⁶。



動詞に後続する「も」の付加される位置に関しては、ノ格主語の未確定代名詞を束縛できることから AspP に付加されると考えられる。「も」が AspP に現れると、「も」の作用域は、AspP 全体に及ぶため、「も」は未確定代名詞のノ格主語を束縛することができるのである。

Asp は Neg より低い位置に現れ、NegP はサー感嘆文の終助詞サーの補部として出てこない。このことから、サー感嘆文のサーは AspP を選択し、それよりも上位の構造位置に投射する TP や NegP は選択していないと考えられる。本論の分析で

¹⁶ ノ格主語は、動詞から意味役割を受けるので、最初は動詞句内に現れると考えられる。また、ノ格主語が主語移動によってではなく AspP 指定部に直接生起するという可能性はカラ格主語のデータから排除される。カラ格主語は、第4節で見たように、vP に付加された位置に留まる。このカラ格主語は、他のタイプの主語と同様に、主語指向性のある「自分」の先行詞となることができる。

- (i) 太郎_iから自分_iのことは花子に話したばい。
「太郎_iから自分_iのことを花子に話したよ。」

この事実、vP に存在する主語が「自分」の先行詞となれることを示している。もしノ格主語が AspP に直接生起した場合には、ノ格主語は (vP 内には現れないため)「自分」の先行詞とはなれないことが予測される。事実としては、ノ格主語も「自分」の先行詞となれるために、ノ格主語は vP から AspP に上昇していなければならないことがわかる。

また、受動態と非対格動詞の主語もノ格主語になることができるが、受動態と非対格動詞の主語となりうる項は、目的語位置にあった名詞句が A 移動によって主語位置に移動している。

- (ii) a. 太郎の叱られよった。 b. [TP [Asp 太郎の [vP 太郎の叱られ]よっ]た]
「太郎が叱られていた。」
(iii) a. 雨の降りよった。 b. [TP [Asp 雨の [vP 雨の降り]よっ]た]
「雨が降っていた。」

受動態の主語や非対格動詞の主語は、もともと目的語の位置に生起しているので、内項の数量を指定する「いっぱい」の数量指定の対象となる。

- (iv) a. 学生の先生にいっぱい叱られた。
「たくさんの学生が先生に叱られた。」
b. 台風でガラスの昨日いっぱい割れた。
「台風でたくさんのガラスが昨日割れた。」

これに対して、他動詞や非能格動詞の主語は「いっぱい」の数量指定の対象とはならない。

- (v) a. 学生の本ば図書館でいっぱい読んだ。
「学生が本を図書館でたくさん読んだ。」
b. 学生のグラウンドでいっぱい走った。
「学生がグラウンドでたくさん走った。」

これらすべてのタイプの主語は、再帰代名詞の先行詞となりうるという主語の性質を持っている。このことから、受動態や非対格動詞のノ格主語は、AspP 指定部に直接生起したわけではなく、もともと動詞句内の内項の位置にあって、そこから AspP 指定部へと移動していなければならないことがわかる。

は、ノ格主語が AspP にあるので、サー感嘆文に AspP が存在するならば、ノ格主語の生起が許されることになる。なお、サー感嘆文は目前で生じた出来事に対して感情を表出する構文で、単なる状態の意味を表すのではなく、出来事の発生という一種のアスペクト的な意味が含意される。そうであるならば、サー感嘆文に AspP の投射があることは十分に期待される。

サー感嘆文は AspP を補部にとるが、トルやヨルが現れる[*太郎の走っとるさー。] や [*太郎の走りよるさー。] は容認されない。これは統語的理由ではなく、形態的理由による。具体的には、サー感嘆文におけるサーは形容詞の語幹に付き、動詞には付かない。トルとヨルは存在動詞の「おる」に由来する(工藤(編)2004)。トルはもともと動詞のテ形に「おる」が付いた「ておる」から来ており、音声的な縮約によってトルができたと思われる。(現在の肥筑方言の文法では、トルの文法化が進みアスペクト辞として一語化しているので、トルに「て」の投射が内在しているわけではない。) また、ヨルはもともと複合動詞の後項動詞として現れる「おる」に由来し、音声的变化を受けてヨルとなった。このように、トルとヨルは動詞由来のアスペクト形式で、動詞型の活用をするため、サー感嘆文とは共起しないのである。

「もう」や「まだ」のような副詞は、本論の分析に対してさらなる支持を与える。「もう」や「まだ」のようなアスペクトに関する意味を指定する副詞は、トルとヨルが接続しない形容詞文に現れることができる。そして「もう」や「まだ」の分布から、(サー感嘆文のもとになる)形容詞述語文でも、統語構造上は AspP が投射していることを示すことができる¹⁷。

(40) 太郎は{まだ/もう}忙しくない。

「まだ」と「もう」は、それぞれ、述語の表す出来事がすでに成立している状態になっているという意味やそのような出来事が終了状態に達していないというアスペクトの意味を表す。「まだ」や「もう」が現れない形容詞文ではこのアスペクト(変化)の意味は得られない。これは、Asp の主要部が空であり、かつ、AspP 内にアスペクトの意味を表す要素が現れていないからである。しかし、統語的には、形容詞述語文にも AspP が存在する。そのため、(40)のように、「まだ」や「もう」を AspP に付加し、アスペクトの意味を表すことができる。

(40)の副詞の「まだ」や「もう」は形容詞と共起しているが、動詞文にも現れることができる。動詞文からは vP 分裂文を派生することができるので、「まだ」や「もう」が実際に vP よりも上位に投射された AspP に付加される要素であることを示すことができる。

(41) a. 太郎はまだ来ん。 b. 太郎はもう働いた。 c. もう雨の降るばい。
「太郎はまだ来ない。」 「太郎はもう働いた。」 「もう雨が降るよ。」

¹⁷ 村上(2004)は、熊本県下の一部の方言話者が形容詞にアスペクト形式が付く例を許容することを報告している。

(41) の動詞文は、トルやヨルが現れていないので、もともと変化の含意はない。しかし、「まだ」や「もう」が現れると、(40) の形容詞と同じように変化の含意が現れる。これは、「まだ」や「もう」が変化の意味を与えるからである。「働く」の動詞述語文から派生された vP 分裂文では、「まだ」や「もう」は、(42) や (43) のように、前提節にのみ現れることができる。

(42) a. [太郎がまだしよる]とは[働く]ことばい。

b. *[太郎がしよる]とは[まだ働く]ことばい。
「太郎がまだしているのは働くことだ。」

(43) a. [太郎がもうした]とは[働く]ことばい。

b. *[太郎がした]とは[もう働く]ことばい。
「太郎がもうしたのは働くことだ。」

(42) や (43) の vP 分裂文の分布から、「まだ」や「もう」は、vP に付加された要素ではなく、述語の外部に現れる AspP を修飾する要素であることがわかる¹⁸。この事実から、「まだ」や「もう」は、(40) のような形容詞述語文では形容詞述語から投射した形容詞句 (aP) の上位に位置する音形を持たない AspP に付加されていると考えることができるのである。

本論の提案では、AspP は vP より高い位置を占めるため、AspP の主要部を占めるトルとヨルは vP 分裂文の焦点部には現れないと予測される。この予測は正しく、(44) に示すように、トルとヨルは vP 分裂文の前提節のみに現れることができる。

(44) a. [太郎がし{とっ/よっ}た]とは[走る]ことばい。

「太郎がしていたのは走ることだ。」

b. *[太郎がした]とは[[走っとる/走りよる]]ことばい。

さらに、トルとヨルを vP 分裂文の前提節に生起させた上で、主語の分布を再確認すると、(45) のように、ガ格とノ格はやはり前提節のみに現れる。

(45) a. [太郎{が/の}昨日し{とっ/よっ}た]とは[走る]ことばい。

「太郎が昨日していたのは走ることだ。」

b. *[昨日し{とっ/よっ}た]とは[太郎{が/の}走る]ことばい。

これに対して、(46) のように、主語移動を起こさないカラ格主語は、vP に付加さ

¹⁸「まだ」や「もう」とは異なり、「ずっと」は変化を表さず、動詞(述語)が記述する事態が継続する期間を指定する。このタイプの副詞は vP に付加されるので、(i) に示すように、vP 分裂文の前提節に現れても焦点位置に現れてもよい。

(i) 太郎が(ずっと)しよるとは(ずっと)働くことばい。

「太郎が(ずっと)しているのは(ずっと)働くことだ。」

この事実は、「まだ」と「もう」が付加される投射と「ずっと」が付加される投射が異なることを示している。

れているので、前提節と焦点部の両方に現れることができる。

- (46) a. [昨日太郎からし{とっ/よっ}た]とは[次郎に話しかける]ことばい。
 b. [昨日し{とっ/よっ}た]とは[太郎から次郎に話しかける]ことばい。
 「昨日(太郎から)していたのは(太郎から)次郎に話しかけることだ。」

(44) に示されるように、トルとヨルは、vP 分裂文では、前提節にしか現れることができない。同様に、ノ格主語も前提節にしか現れることができない。このことから、ノ格主語が現れる vP 分裂文は、(47) のような構造を持ち、ノ格主語は vP の中から AspP の指定部に上昇していると言うことができる。

- (47) $\underbrace{[TP \text{ AspP SUBJ-}no \quad [vP \text{ SUBJ-}no \quad v] \text{ Asp}] T]}_{\text{前提節}} -to-wa \underbrace{[vP \quad v]}_{\text{焦点部}} -koto-bai$

vP 分裂文では、ガ格主語もノ格主語と同じ振る舞いを示すが、第3節でも見たように、ガ格主語は、ノ格主語とは異なり、動詞の後に現れる「も」による束縛ができず、時制の投射のないサー感嘆文にも生起できない。このことから、ガ格主語は vP 内の主語位置から TP の指定部に移動していると考えられる。以上の議論から、ノ格主語とガ格主語は、それぞれ、(48) に示されているように、TP の指定部と AspP の指定部という異なる構造位置に A-移動を起こしていると結論づけることができる。

- (48) a. $[TP \text{ SUBJ-}ga \quad [AspP \quad [vP \text{ SUBJ-}ga \quad v] \quad Asp] \quad T]$
 $\quad \quad \quad \uparrow \quad \quad \quad \uparrow$
 b. $[TP \quad [AspP \text{ SUBJ-}no \quad [vP \text{ SUBJ-}no \quad v] \quad Asp] \quad T]$
 $\quad \quad \quad \uparrow$

ノ格主語が AspP の指定部に移動するという提案で最も重要な点は、ノ格主語がトル・ヨルや「まだ」「もう」のようなアスペクト要素と並行的な統語的な振る舞いを示すことが捉えられる点である。さらに、本論の分析では、ノ格主語が vP 分裂文において前提節にも焦点部にも現れる vP に付加されたカラ格主語と異なる振る舞いをすることも捉えることができる。ノ格主語は vP 分裂文では TP の指定部に現れるガ格主語と同じく前提節にしか現れないが、未確定代名詞束縛やサー感嘆文でガ格主語とは異なる振る舞いをする。このノ格主語の事実は、ノ格主語が単に vP 内に存在するとする従来の分析では説明することができない¹⁹。

¹⁹ ノ格主語の移動先を AspP の指定部とする代わりに、vP と NegP の間に存在する何らかの機能範疇の投射 FP の指定部とする代案も考えられなくはない。しかし、その投射がどのようなものなのかが明らかにされない限り、そのような仮説は反証可能性が高いとは言えない。これに対して、ノ格主語が AspP の指定部に現れるとする本論の仮説は、NegP と vP の間に現れるアスペクト副詞や、AspP の主要部に現れるトルやヨルと同様の統語的な振る舞いをするを予測し、経験的な事実によって容易に検証することができる反証可能性の高い仮説である。

本論の分析は、主語のガ格とノ格の交替が単なる格交替ではなく、主語の格の違いにより構造位置の違いがあることを示している。第2節において、肥筑方言では、ガ格主語は中立叙述または総記の解釈、ノ格主語は中立叙述のみの解釈を持つことを見た。本論の分析では、この格標示の違いによって起こされる一見したところでは不可解な主語の解釈の非対称性を(48)の派生と関係づけて説明することができる。具体的には、肥筑方言において、主語は、中立叙述を表す Neutral Description (ND) 素性あるいは総記を表す Exhaustive Listing (EL) 素性を持つと考えることができる。そして、ND 素性は、Asp によって認可され、EL 素性は T によって認可されると仮定する。そうすると、ガ格主語は、AspP の指定部を經由して TP の指定部まで移動するので、ガ格主語が EL 素性を持つと、その意味素性は TP 内で認可され総記の意味が表される。ガ格主語が ND 素性を持つと、AspP 内でその意味素性が認可され、中立叙述の意味が表される。一方で、ノ格主語は AspP 指定部までは移動するが、TP の指定部までは移動しないので、認可される意味素性は ND 素性のみである。そのため、ノ格主語には中立叙述の解釈しか生じない。つまり、ガ格主語とは異なり、ノ格主語が総記の解釈を持たないという、一見不可解な解釈の非対称性は、構造的な要因から生じていることが示唆されるのである。

さらに、第3.1節で見たノ格主語が未確定代名詞束縛を受けることができるという事実に関して、本論の分析から、「も」の作用域は vP ではなく AspP であることが示唆される。動詞の後に来る「も」は表面上 vP を作用域にとるように見えるが、実際には、(49) に示しているように、「も」は、AspP の上位に位置するため、その作用域は AspP まで及ぶ。そのために、未確定代名詞のガ格主語は「も」による束縛ができず認可されないものの、未確定代名詞のノ格主語は「も」による束縛が可能であるため認可されるのである。

(49) [TP SUBJ-*ga* [NegP [AspP SUBJ-*no* [vP v] Asp]-*mo* Neg] T]

「も」の作用域

猿渡 (2015) は、動詞に後続する「も」の束縛可能領域が vP であるという Kishimoto (2001) の提案を受け入れ、ノ格主語が vP 内に留まると主張している。しかし、第3.3節で見た vP 分裂文の事実から、ノ格主語は、カラ格主語とは異なり、より上位の AspP 指定部へと移動していることがわかる。ノ格主語の未確定代名詞が動詞に後続する「も」によって束縛できるという事実は、「も」が vP ではなく AspP を作用域とすることを示しているのである。

5. 素性継承と主語移動

肥筑方言では、ガ格主語もノ格主語もともに意味役割が与えられる vP の主語位置から vP 外に移動を起こすことをこれまで見てきた。生成文法においては、主語移動は EPP 素性を駆動力とし、EPP 素性を有する主要部 (格を認可する主要部)

カニズムでTから認可を受けていると分析されることが多い（例えば、Chomsky 1981）。この分析は、主語はどの位置に現れていてもTによって格が認可されるということが前提になる。また、主格以外の格で主語を標示する言語もある。最も広く観察されるのは与格主語であるが、与格主語は特定の意味役割を持つ項に限定されるため、Chomsky (2000) などでは、与格は構造格ではなく、内在格として扱われている。その他、アジアの言語の中には、例えば、ベンガル語、ヒンディー語、マラーティー語のように、主語を属格で標示する構文を持つ言語もある（Kishimoto 2014）。一見、これらの言語の属格主語は、肥筑方言のノ格主語と類似しているように見えるが、実際には、異なる性質を持っている。これらの言語の属格主語は、与格主語の場合と同じように、特定の意味役割を持つ項に限定されるため、内在格であると考えられる。これに対して、肥筑方言のノ格主語は、ガ格主語と同様に、意味役割についての制限がないため、ノ格主語のノ格は構造格であると考えられる。また、主語のA-移動は、理論的には、EPPの要請によって駆動されるが、記述的には、構造格の認可と連動する移動とみなすことができる（Kishimoto 2017）。したがって、TPへのA-移動を起こすガ格主語とは異なり、ノ格主語がAspPへA-移動を起こすのであれば、Aspがノ格を認可すると考えることができる。Tが主格を認可するのに対して、肥筑方言のノ格が、ガ格とは異なる格認可子によって認可されるのであれば、肥筑方言のノ格主語は通言語的に見てもかなり独特な性質を持つものであると言える。

次に、素性継承の分析では、素性継承が起こらなければ、CがEPP素性を持ち、主語がCPへ移動することを予測する。通常、日本語の主語は、TPの指定部に移動することが仮定されることが多いが、Saito (2011) は、日本語において、CからTへの素性継承は起こらず、主格主語はCPへ移動する可能性を示唆している。しかしながら、主格主語はCPに存在しないことを示す証拠が存在する。

日本語において、TPよりも上位の投射に現れる要素としては、題目化された要素がある。Kishimoto (2009) は、日本語の主格主語はTP内に存在し、題目はCP内に存在することを論じている。Saito (2011) の分析が正しければ、題目化されない主格主語もCPにあることになるが、(51)の事実は、その予測が正しくないことを示唆している。

- (51) a. 太郎が賢か**だけ**ばい。 b. 太郎**は**賢か**だけ**ばい。
 「太郎が賢**い**だけだ。」 「太郎は賢**い**だけだ。」

Kishimoto (2009) が観察しているように、「だけ」はTP内の構成素を焦点化することはできるが、それより上位の構造位置に現れる構成素を焦点化することはできない。題目は、CPと関係づけられる要素なので、「だけ」による焦点化を受けられない。しかし、ガ格主語の「だけ」による焦点化は可能である。これらの事実と、第3.1節で見た未確定代名詞束縛の事実を考慮すると、ガ格主語はCPよりも下位の投射であるTP内になければならないことになる。

本論で議論している分裂文を使用しても、ガ格主語がCP指定部にはないことを示すことができる。まず、(52)で示すように、題目やモーダル副詞のようなCPに現れる要素は、動詞句分裂文の焦点のみならず、前提節にも現れることができない。

- (52) a. *太郎がおそらくしたとは[校庭で走る]ことばい。
 「*太郎がおそらくしたのは校庭で走ることだ。」
 b. *太郎がしたとは[校庭でおそらく走る]ことばい。
 「*太郎がしたのは校庭でおそらく走ることだ。」
 c. おそらく[太郎がした]とは[校庭で走る]ことばい。
 「おそらく太郎がしたのは校庭で走ることだ。」

動詞句分裂文の焦点位置にはvPが現れているので、CPに現れるモーダル副詞は現れない。また、この副詞は、前提節にも現れることができない。(ただし、(52c)のように、モーダル副詞が前提節ではなく、文全体を修飾する場合には容認される。)これに対して、TPに付加される時間副詞「昨日」は前提節に現れることができる。

- (53) [太郎が昨日した]とは[校庭で走る]ことばい。
 「太郎が昨日したのは校庭で走ることだ。」

(52)と(53)の事実から、vP分裂文の前提節はTPの投射までしかないとわかる。ここで、ガ格主語がどのような振る舞いをするかを見ると、(54)のように前提節にガ格主語が現れても問題は無いが、主語に題目化が起ると容認されなくなる。

- (54) [{太郎が/*太郎は}昨日した]とは[校庭で走る]ことばい。
 「[{太郎が/*太郎は}昨日したのは校庭で走ることだ。]

(54)の事実は、題目がCPに現れる要素であるが、ガ格主語はCPには現れないことを示している。以上の事実から、ガ格主語の移動に関しては、CにEPP素性があり、CPの指定部に移動するとする分析よりも、CからTへの素性継承の結果、ガ格主語はTPの指定部に移動するとする分析の方が妥当であると言える²¹。

最後に、日本語の中にノ格が生起する肥筑方言と生起しない方言(例えば、東京方言)との違いはどこにあるのかという問題について考察を加えたい。日本語には、標準語であれどの方言であれ、句構造の中にAspが投射されてよいはずである。

²¹ 岸本(2020)は、主語が例外的にヲ格で標示されるときは、EPP素性の継承がなく、CP指定部、ガ格で標示されるときはTP指定部に移動することを論じている。ヲ格主語は埋め込み節の中でガ格主語と同じ構造位置を占めるわけではなく、CPの指定部に現れる。ヲ格がCPに現れることは副助詞「だけ」の焦点化のテストから検証できる。(ia)の「だけ」は「花子だけがかわいい」という解釈を許すが、(ib)では同じ読みが許容されない。

- (i) a. 太郎は花子がかわいいだけだと言った。
 b. 太郎は花子をかわいいだけだと言った。

したがって、「だけ」の焦点化を受けるガ格主語はTP内、焦点化を受けないヲ格主語はCP領域にあるということになる(岸本2020)。

そうすると、例えば、標準語や東京方言においても、肥筑方言のように、ノ格主語が主節の Asp の主要部で認可されてもよいはずであるが、実際にはノ格主語は主節には現れない。この点について論ずることは、本論の目的を越えるものであり、推測の域を出ないが、1つの可能性を以下で指摘したい。

主節においてノ格主語を許容する肥筑方言と主節でノ格主語を許容しない標準語や東京方言の差異は、歴史的変化の起こり方の違いから来ている可能性が高い。上代語ではガ格とノ格の生起はほとんど連体修飾節に限られ、主節では無助詞が一般的であったことが知られている(野村 1996)。中世になるとガ格とノ格はともに主節に進出するが、近世以降ガ格とノ格の役割分担の分化が進み、主節にはガ格のみが生起するようになったとされる(柳田 1993 など)。一方、肥筑方言では、ガ格だけでなくノ格も主節に残った。肥筑方言においては、ガ格とノ格の分化も受容した上で、さらに埋め込み節でのガ格とノ格の重複する役割を主節にも拡張するという有標の選択を行ったことになる。主節の主語をガ格とノ格で標示することは、ガ格とノ格の役割の分化とは衝突する選択であり、他の方言では、そのような選択を行わず、ガ格とノ格の役割の重複を解消する方向に進んでいったため、主節でのノ格主語が現在では見られないと考えられる。主節において主語の構造格を認可する主要部を2つに分けるという肥筑方言の選択は、総記の解釈と中立叙述の解釈という意味的な区別を構造格(ガ格とノ格)で区別するという動機付けからもたらされた可能性がある。標準語など、肥筑方言以外では、総記や中立叙述は、単に意味的に区別されるだけであるが、肥筑方言は、これを形態・統語的に区別するからである。本論の議論から言えば、標準語では、Tのみが主語の格認可として機能し、そこにEPP素性を転移させるが、肥筑方言では、TとAspの2つを格認可子として機能させ、EPP素性をそこに転移させるという有標の文法の選択をしたことになる。ただし、ここで言及した方言間の違いの出現の要因や動機づけはあくまで1つの可能性であり、本論でこの可能性やその他の可能性の妥当性について検討することはできない。この点に関しては将来の研究課題としたい。

6. 結語

肥筑方言の主節の主語にはノ格とガ格の格標示を与えることが可能であるが、両者は異なった統語的振る舞いを示す。先行研究においては、ガ格主語とは異なり、ノ格主語がvP内に留まるという分析もあるが(Kato 2007; 猿渡 2015; Nishioka 2018; Ochi and Saruwatari 2018)、本論で議論したvP分裂文の焦点部にノ格主語が現れないという事実は、vPより上位にノ格主語があることを示唆している。しかし、未確定代名詞束縛やサー感嘆文に関するデータからは、ノ格主語は、ガ格主語よりも構造的に下位の位置に現れていなければならない。この二種類のデータから、本論では、ノ格主語はAspPの指定部に上昇し、ガ格主語がTPの指定部に上昇すると提案した。このことは、肥筑方言において、EPPの要請が課される投射が主語の形態的な格標示によって異なることを示唆する。ガ格主語構文ではTにEPPの

要請が課されることで、動詞句内から主語がTPの指定部に移動するが、ノ格主語構文では、EPPの要請がAspに課されることで、主語はAspPの指定部に移動するのである。本論で提示した主語の統語位置をめぐるデータは、肥筑方言におけるノ格主語は、移動せずにvP内に留まるのではなく、ガ格主語よりも低いAspPに移動することを示している。

参考文献

- Bobaljik, Jonathan David and Dianne Jonas (1996) Subject positions and the roles of TP. *Linguistic Inquiry* 27: 195–236.
- Burzio, Luigi (1986) *Italian syntax*. Dordrecht: Reidel.
- Chomsky, Noam (1981) *Lectures on government and binding*. Dordrecht: Foris.
- Chomsky, Noam (1986) *Knowledge of language: Its nature, origin and use*. New York: Praeger.
- Chomsky, Noam (1995) *The minimalist program*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Chomsky, Noam (2000) Minimalist inquiries: The framework. In: Roger Martin, David Michaels, and Juan Uriagereka (eds.) *Step by step: In honor of Howard Lasnik*, 89–155. Cambridge, MA: MIT Press.
- Chomsky, Noam (2008) On phases. In: Robert Freidin, Carlos P. Otero, and Mari Luisa Zubizarreta (eds.) *Foundational issues in linguistic theory: Essays in honor of Jean-Roger Vergnaud*, 133–166. Cambridge, MA: MIT Press.
- Chomsky, Noam (2013) Problems of projection. *Lingua* 130: 33–49.
- Chomsky, Noam (2015) Problems of projection: Extensions. In: Elisa Di Domenico, Comelia Hamann and Simona Matteini (eds.) *Structures, strategies and beyond: Studies in honour of Adriana Belletti*, 3–16. Amsterdam: John Benjamins.
- Fukui, Naoki (1986) A theory of category projection and its application. Doctoral dissertation, MIT.
- 濱中誠 (2009) 「40 ほんなこてにかさー 肥筑方言の詠嘆表現」九州方言研究会 (編) 『これが九州方言の底力!』 174–177. 東京: 大修館書店.
- Kato, Sachiko (2007) Scrambling and the EPP in Japanese: From the viewpoint of the Kumamoto dialect of Japanese. In: Yoichi Miyamoto and Masao Ochi (eds.) *Formal Approaches to Japanese Linguistics 4, MIT Working Papers in Linguistics* 55, 113–124. Cambridge, MA: MIT Working Papers in Linguistics.
- Kishimoto, Hideki (2001) Binding of indeterminate pronouns and clause structure in Japanese. *Linguistic Inquiry* 32: 597–633.
- Kishimoto, Hideki (2007) Negative scope and head raising in Japanese. *Lingua* 117: 247–288.
- Kishimoto, Hideki (2009) Topic prominence in Japanese. *The Linguistic Review* 26: 465–513.
- Kishimoto, Hideki (2012) Subject honorification and the position of subjects in Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 21: 1–41.
- Kishimoto, Hideki (2014) Dative/genitive subjects in Japanese: A comparative perspective. In: Mamoru Saito (ed.) *Japanese syntax in comparative perspective*, 228–274. Oxford: Oxford University Press.
- 岸本秀樹 (2015) 『文法現象から捉える日本語』 東京: 開拓社.
- 岸本秀樹 (2016) 『文の構造と格関係』 村杉恵子・斎藤衛・宮本陽一・瀧田健介 (編) 『日本語文法ハンドブック: 言語理論と言語獲得の観点から』 102–145. 東京: 開拓社.
- Kishimoto, Hideki (2017) Negative polarity, A-movement, and clause architecture in Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 17: 109–161.
- 岸本秀樹 (2020) 「例外的格付与構文」 村杉恵子・高橋大厚・瀧田健介・高橋真彦 (編) 『日本語研究から生成文法へ』 250–265. 東京: 開拓社.
- 工藤真由美 (編) (2004) 『日本語のアスペクト・テンス・ムード体系』 東京: ひつじ書房.
- Kuno, Susumu (1973) *The structure of the Japanese language*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Kuroda, S.-Y. (1965) Generative grammatical studies in the Japanese language. Doctoral dissertation, MIT.
- Kuroda, S.-Y. (1988) Whether we agree or not: A comparative syntax of English and Japanese. In:

- William Poser (ed.) *Papers from the Second International Workshop on Japanese Syntax*, 103–143. Stanford, CA: CSLI.
- 九州方言学会 (編) (1991) 『九州方言の基礎的研究 改訂版』 東京：風間書房。
- Miyagawa, Shigeru (2001) EPP, scrambling, and *wh*-in-situ. In: Michael Kenstowicz (ed.) *Ken Hale: A life in language*, 293–338. Cambridge, MA: MIT Press.
- 村上智美 (2004) 「熊本方言における「寂ッシャシトル、高シャシトル」という形式について」
工藤真由美 (編) 『日本語のアスペクト・テンス・ムード体系』 204–218. 東京：ひつじ書房。
- Nishioka, Nobuaki (2018) On the position of nominative subject in Japanese: Evidence from Kumamoto Dialect. In: Theodore Levin and Ryo Masuda (eds.) *Proceedings of the 10th Workshop on Altaic Formal Linguistics, MIT Working Papers in Linguistics 87*, 165–177. Cambridge, MA: MIT Working Papers in Linguistics.
- 野村剛史 (1993) 「上代語のノとガについて」『国語国文』 62(2): 1–17 & 62(3): 30–49.
- 野村剛史 (1996) 「ガ終止形へ」『国語国文』 65(5): 524–541.
- Ochi, Masao and Asuka Saruwatari (2018) Nominative genitive conversion in (in)dependent clauses in Japanese. In: Theodore Levin and Ryo Masuda (eds.) *Proceedings of the 10th Workshop on Altaic Formal Linguistics, MIT Working Papers in Linguistics 87*, 191–202. Cambridge, MA: MIT Working Papers in Linguistics.
- Richards, Marc D. (2007) On feature inheritance: An argument from the Phase Impenetrability Condition. *Linguistic Inquiry* 38: 563–572.
- Rizzi, Luigi (1982) *Issues in Italian syntax*. Dordrecht: Foris.
- Saito, Mamoru (2009) Optional A-scrambling. In: Yukinori Takubo, Tomohide Kinuhata, Szymon Grzelak and Kayo Nagai (eds.) *Japanese/Korean Linguistics 16*, 44–63. Stanford, CA: CSLI.
- Saito, Mamoru (2011) Two notes on feature inheritance: A parametric variation in the distribution of the EPP. *Nanzan Linguistics* 7: 43–61.
- Saito, Mamoru (2016) (A) case for labeling: Labeling in languages without ϕ -feature agreement. *The Linguistic Review* 33: 129–175.
- 坂井美日 (2013) 「現代熊本市方言の主語表示」『阪大社会言語学研究ノート』 66–83. 大阪：大阪大学。
- 猿渡翌加 (2015) 「ガノ可変と他動性制約」『言語文化共同研究プロジェクト 2014：自然言語への理論的アプローチ』 21–30. 大阪：大阪大学。
- 柴谷方良 (1978) 『日本語の分析』 東京：大修館書店。
- 住田幾子 (1986) 「肥筑方言に見られる心情訴え文について」『梅光女学院大学日本文学会』 1–10. 山口：梅光学院大学。
- Takezawa, Koichi (1987) A configurational approach to case marking in Japanese. Doctoral dissertation, University of Washington.
- 上村孝二 (1983) 「1 九州方言の概説」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一 (編) 『講座方言学 9 九州地方の方言』 1–28. 東京：国書刊行会。
- 柳田征司 (1993) 「「の」の展開、古代語から近代語への」『日本語学』 12(11): 15–22.
- 吉村紀子 (2007) 「「ガ」・「ノ」交替を方言研究に見る」長谷川信子 (編) 『日本語の主文現象—統語構造とモダリティ—』 189–223. 東京：ひつじ書房。
- Zanuttni, Raffaella (1996) On the relevance of tense for sentential negation. In: Adriana Belletti and Luigi Rizzi (eds.) *Parameters and functional heads: Essays in comparative syntax*, 181–207. New York: Oxford University Press.

執筆者連絡先：

[受領日 2020年3月31日

森山 倭成, 岸本 秀樹

最終原稿受理日 2021年5月19日]

神戸大学大学院人文学研究科

e-mail: kaz.moriyam3[at]gmail.com (森山), kishimot[at]kobe-u.ac.jp (岸本)

木戸 康人

九州国際大学現代ビジネス学部

e-mail: y-kido[at]cb.kiu.ac.jp

Abstract**Raising of *No*-Marked Subjects in the Hichiku Dialect of Japanese**

KAZUSHIGE MORIYAMA
*Kobe University/
 JSPS Research Fellow*

HIDEKI KISHIMOTO
Kobe University

YASUHITO KIDO
*Kyushu International
 University*

In the Hichiku dialect of Japanese, subjects can be marked with *no* as well as *ga* irrespective of whether they appear in matrix clauses or embedded clauses. Previous studies have claimed that *no*-marked subjects, unlike *ga*-marked subjects, stay in vP without undergoing Subject Raising (A-movement). Contrary to previous studies, this paper argues that *no*-marked subjects are raised to AspP, which is the projection sandwiched between NegP and vP. To make this point, it is first shown, drawing data from indeterminate pronoun binding and *saa*-exclamation, that *no*-marked subjects occupy a structural position lower than *ga*-marked subjects. Then, it is argued, on the basis of vP-clefting, that *no*-marked subjects are displaced from a vP-internal subject position and occur in a higher structural position than vP. Overall, the data suggest that *no*-marked subjects undergo A-movement to Spec-AspP from within vP, while *ga*-marked subjects are raised to Spec-TP.